

第4回幼児教育実践学会：口頭発表

平成25年8月24日（土）9：00～10：30

関東地区：秋山恵子（清心幼稚園教諭）

茂木一司（群馬大学教育学部教授）

【研究テーマ】

「生活の中での幼児と保育者の育ちを考える」

I. 企画趣旨

前年度の関東地区教員研修大会で「3・4・5歳児の生活をふまえた学びの連続性を考える」をテーマに問題提起をした。その際、幼児が主体的に遊び学んでいくためには、どのような環境が望ましいのか、保育者の主体性や柔軟性についても考え、探求してきた。

今年度は引き続き、幼児が生活（遊び）の中で多様な環境と関わる姿、および保育者の変化にも着目して研究を進めてきた。本学会では、主に5歳児の保育実践からアプローチする。なお、当日は、参加者同士によるワークショップも取り入れながら考え合っていきたい。

II. 研究テーマの設定理由

幼児が園内で生活するとき、遊びの中で、人・モノ・空間などの環境と関わっている。その中で、幼児は様々な経験を重ね、様々な思いを抱きながら過ごしている。

一方、保育者は（前年度の研究から）、幼児が主体的に生活していく中で、幼児の気持ちを汲んだりつぶやきを拾ったりしながら、柔軟に環境を変えたり、保育者の思いや考えを幼児に伝えたりすること、「対話的に保育する」姿勢が大切であると改めて見えてきた。

そこで、本研究では、実際に多種に展開（変化）する遊びに対して、保育者がどのように受け止め、環境を再構成しようと試みているのか、保育者の思いやその過程にも着目し、「幼児と保育者とが育ち合う保育」について明らかにしていきたい。

なお、研究にあたっては、5歳児（A男）の保育実践記録を抽出し検討する。

III. はじめに

本園は、群馬県前橋市に1895（明治28）年に設立された。現在、近隣は、県庁や市役所が位置する官庁街となっている一方、前橋公園や利根川などの四季を感じられる環境にある。

保育においては、生活の中で、幼児が対話的（対象物や対象世界・他者・自分自身）に関わり合う環境を大切にしている。その中で保育者は、幼児と保育者とが、お互いの主体性や持ち味を生かし合えるよう心がけている。最近では、幼児が生活する身近な地域全体も保育の場と考え、市内の中心商店街や美術館、現代アーティストなど、さらに多様な環境と幼児とが直接的に関わる保育を実践している。

なお、現在の園児数は以下のとおりである。

学年	満3歳	3歳児	4歳児	5歳児
クラス	1	2	2	2
園児	1	22	20	31

（2013年5月現在）

IV. 研究方法

1. 対象児：5歳児クラスのA男
2. 日時：2013年4月～7月
3. 方法：保育実践を写真撮影し、その映像記録と保育日誌を分析・考察する。なお、本研究の目的のため、以下の二事例を抽出する。

V. 事例の検討

（事例の背景：A男のこれまでの姿）

年少組から年中組にかけてのA男は、乗り物に興味を持つ姿が園の中で定着していた。よく一人で、電車の絵を描いたり、積み木で電車が走る街を作ったり、想像力と描写力とに驚かされる場面にかかわってきた。同じ遊びを友だちと関わりながら遊び始めるものの、自分の想像の展開になりがちで、一人遊びが多かった。

年長組になり、同じく乗り物が大好きで、絵を描いたり、乗り物になりきったりして楽しむB男とC男との中にA男が加わるようになった。

6月に入り、フラフープを乗り物に見立て、個々

のフラフープの輪の中に入って、園庭を勢いよく走る3人の姿が連日あった。B男、C男の関わりにもA男が入ることで、それぞれに新鮮で、かつ、A男自身もB男、C男と共有する遊びを楽しんでいた。

事例①「ヒミツの場所」(6月24日)

この日、A男が遅めの登園をすると、すでにB男、C男がフラフープを使った乗り物ごっこを始めており、その姿を受け足早に向かっていた。A男なりのこだわりで、使うフラフープはいつもヒミツの場所に収納している。

ところが、その唯一のものをD男が持っていることに気付く。「僕のだよ。」と主張するA男に対し、「僕が先に使っているんだよ。」と主張し、ぶつかり合う。A男は、突如D男から奪い、走り去っていった。追いかけるD男と、D男を意識しつつ背を向けるA男。保育者S(以下、S保)から話し合いを提案するが、主張のぶつかり合いで話が進まない。問答の末、A男が「じゃあ、いいよ!」と怒り口調で自ら折れた。

そして、裏庭へ走り、園舎裏に抜けるフェンスを超え始めた(以前、壊れたフラフープが置かれたのを覚えていて思い出したようである)。壊れたフラフープを手に、マスキングテープで直し始める。「これでいいや!」と自分なりに納得したかたちで仕上げ、B男、C男のもとへ走っていった。

事例②『『おもしろい』を見つける時 / いつまで使うの?』(7月22日)

A男はいつものようにB男、C男ともに乗り物ごっこをしていた。しかし、この日は途中で遊びを抜けた。抜けたことを疑問に思った保育者H(以下、H保)は、普段と違う姿が見られるのではないかと思い、A男を追うことにした。

A男は、ホースと砂場の遊具を使って、遊び出した。ホースの先を花壇に埋め、「ぶくぶく泡が出てきたよー!」と水圧で土が動く様子を見ていた。しばらく同じ遊びをしていたため、水の使用量が気になり、H保は声を掛けた。

すると、次にA男は砂山に移動し、ホースの水圧で砂山を削っていった。そこでも水を使っていたため、「お水の使い方を考えないと、幼稚園の水がなくなっちゃうかも...。」と、H保がA男に声を掛けた(その後も5分程遊び続けていた)。

すると、近くで遊んでいたF男(3歳児)が、A男の使っているホースの水の量を弱めた。変化に気付いたA男が水道へ向かっている間に、F男がホースで遊び始めた。戻ってきたA男は「いっぱい使うと幼稚園の水がなくなるよ。」とF男に伝えた。

VI. 事例の分析 ー保育者の視点ー

事例①: S保の視点より

- ・A男がこだわりのフラフープをヒミツの場所に収納していることに、敢えて声を掛けず、A男が友だちと遊びたい気持ちが生じていることを大事に見守った。
- ・本来、自由に行き来されていないフェンス超えであり、そこに保育者の主体性をどう出すべきかの葛藤を抱きつつ、A男のやりたい思いがあることを汲み取り、様子を追った。
- ・D男とのトラブルで、自ら折り合いをつけた姿や、新たな方法を考えたところに、A男の心の育ちが感じられる。

事例②: H保の視点より

- ・遊びを遮りたくない思いと、資源を大事に使ってほしいという願いの間で、保育者の思いを伝えるべきなのか、どのタイミングで伝えようか、という保育者の葛藤があった。
- ・A男によるモノとの対話・他者との対話・自分との対話が見られた。
- ・多様な環境を通してのA男の葛藤が伺えた。

VII. まとめ

A男、A男たち、他児との関わり合いの中で、さらに幼児と保育者とが育ち合う環境をともにつくっていくためにはどうすれば良いのか、さらに考えていきたい。